

連載 27 『夜毎の夢』 栗島すみ子の転生

成瀬巳喜男のサイレント映画『夜毎の夢』について、『キネマ旬報』1934年3月1日号の特集、前年度「優秀映画わが推薦の言葉」では複数の批評家が「新人成瀬巳喜男」（池田照勝・菅見恒夫）、「今のところ日本の監督で最もフレッシュ」（中代富士男）と期待を寄せている。

だが、『夜毎の夢』の内容は、女給おみつ（栗島すみ子）と失業者の夫（斎藤達雄）の生活の崩壊を描いて、苦いものだった。

ポンポン蒸気が川を渡る下町。洗濯物がはためく界限。幼い子どもを抱えて苦闘する女給おみつのもとに、3年前に妻子を捨てた夫が舞い戻って来る。追いつめられて踏みとどまるものの、夫は片端から就職を断られ、ヒモの身分である。生活費に困って、身を売ろうかと悩むおみつ、それに対して夫は盗みをはたらき、追いつめられて投身する。夫の遺書を食いちぎるおみつ。演じる栗島すみ子は、ときに男を手玉に取り、ときに憤りを呑み込み、子どものためにたたかう強い女、さすが松竹の大幹部女優だ。新派悲劇風の映画のヒロインとして、女性客の紅涙を絞ったと伝えられる往年の娘役のかよわいふぜいをふりすてた、伝説の名演技である。

北川冬彦は「最近、もう駄目になつて了つたかとも



『夜毎の夢』冒頭における栗島すみ子

思はせた栗島すみ子が、こゝで生きかへり、いや極端にいへば新しい俳優としてこゝに現はれているのは、何んと云つても成瀬巳喜男の手柄であらう」（『キネマ旬報』1933年7月1日）と感嘆し、「芸術的にも最も高い香気をもつた作品である。成瀬巳喜男監督の最近の好調をそのまま押し進めた堂々たる傑作である。ただ余りに高度の表現手法を包んであるので、大衆に無条件に受け入れられるかどうかは疑問であるが、かうした作品を進んで上映することは館としての一つの誇りとするに足るであらう」と評価した。北川は、成瀬監督を「小津安二郎の壘に迫つた」とも述べている。

北川の指摘する「余りに高度の表現手法」とは、説明の省略、映像の伏線の連鎖とそのあざやかな回収、終局の夫の犯罪から投身にいたるシークエンスの表現主義映画の引用風の趣向などを指しているだろうか。

江口光雄（『キネマ旬報』1933年7月21日）は、成瀬について「小津安二郎よりも一層冷酷に現実を把握してゐる」「小津安二郎がメロドラマに逃避せんともがいてゐる間に、成瀬巳喜男は小津安二郎の位置を奪つてしまつた観がある」とまで述べている。江口がとくに注目するのは成瀬の「緻密なコンティニュイティ」である。その一例として、ボール遊びをする子どもの手前を通り過ぎる自動車、子どもが遊び、また失業者の父がもてあそぶ、おもちゃの自動車、そして子どもの自動車事故の知らせなどが、字幕を排し、したがって説明ゼリフもなしに、淡々とたたみかけられてゆく伏線の妙が挙げられている。



『お嬢さん』（1930）ポスターの栗島すみ子と岡田時彦

もっとも映画の冒頭、川縁で男の気をひくおみつの、男たちとのタバコとマッチのギャグめいたやりとりについては、双葉十三郎が「成瀬巳喜男の確実な進歩が全面的に示され」ている、ただし、「最初の一卷半程は別にして」（『キネマ旬報』1934年3月1日）という留保をつけている。つまりこれに続く映像の強度と比較して冗長との指摘だろうが、画面を何度も見返して「ちょっと待って、この崩れた女が、あの栗島すみ子なの？」と観客を驚かせる効果は、じゅうぶんであったろう。